

## (1) 安全を売る為に

先日の NHKTV で「放射能とどう向き合う」という番組が放映されていました。政治に対する意見・提言や簡易な測定器機の話題などの中で、学校給食での食材に対する危惧から家庭で作った弁当を持たせる母親が増えていると報じていました。又、子供の外遊びについても御近所付き合いを棒に振っても妥協しないなど、地域の人間関係にまで影響している面もあるようです。愛しいわが子を思う親心の為せる術と言いながらも、それが全てというには余りにも単純・短絡しすぎてはいないかと危惧せざるを得ませんでした。

東日本大震災と東電原子力発電所の事故は、確かに私たちに食の安全について改めて考えさせられることが多かったと思います。生鮮食品に付着している放射性物質についての信頼できる情報が見当たらないまま、時だけがどんどん進んでしまっています。政府の隠蔽姿勢は明らかだし、各県での検査も発表される結果は大雑把で参考程度にしかならないと思込んでしまっていて、自分なりきの判断で身の安全を守らんが為の言動をとらざるを得なくなっているのでしょうか。今までも BSE や O157、残留農薬騒ぎなど過去に見られなかった事例に怖れおののいた場面も多くありました。

それだけに消費者が食の安全安心に敏感になるのは当然のことと言えるでしょう。しかも過去の経験則からは、人々が安全と考えている、又要求する状況が次第に高水準になって来たと思います。安全の範囲が向上すればするほど求められる部分はより大きく高くなるはずです。しかも、安全性については科学的に数値で示されることが出来、合理的な説明もされていますが、安心であるか否かの判断は正に十人十色です。特にこういう話題に関しては必要以上に潔癖性になり易いと思います。安心するか否かは個人差（主観の違い）で変わってしまうと割り切りながらも、情報は常に発信し続けることが重要だと思います。

(鈴木重雄 筆)